

エビ養殖を通して

世界の町づくりのお手伝い

小田・日本栽培水産(株)油谷研究所 乾 輝男

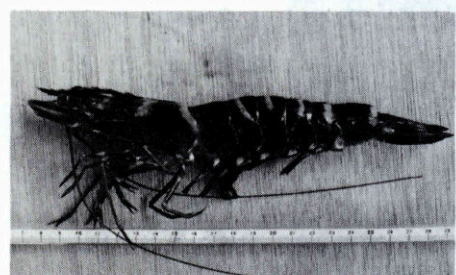


養殖エビの研究

「小田にあるエビの養殖場」と言えば、「おー、それか」と判ってくれる人も多いのですが、「日本栽培水産です」と言っても、知らない人が多いようです。それもそのはず、油谷養殖センター(泉巖組合長)の養殖場に間借りして、わずかに五人でクルマエビの養殖をしているのですから。

研究所とは言っても、国公立や大企業の研究所とは違い、自分達の喰い扶は自分で稼がなくてはなりません。そこで、主な仕事はクルマエビの卵から子供(種苗)を作って、他の養殖場に売ったり、

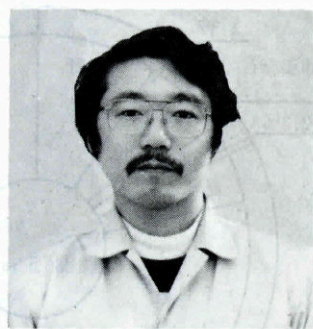
放流したり。また、養殖して大きく育てることです。その合間をみて、クルマエビの人工餌料の開発や、熱帯地域のエビ養殖に関する研究をしています。その研究課題のひとつとして、数年前からウシエビと呼ばれる、主に東南アジア・インド洋に棲んでいるエビの研究をしています。このエビは、味もクルマエビに優るとも劣らないほど美味なのですが、色が黒っぽいということで日本では人気がありません。ところが、このウシエビ——大きくなるとビール瓶ほどにもなるのですが——クルマエビが商品サイズになるのに半年以上経るのに対し、わずか三、四ヶ月で育つてしまします。さらに、クルマエビが肉食性であるのに対し、ウシエビは雑食性であるため、餌代が半分以上で済むのです。そんなわけで、近年台湾やフィリピンで盛んに養殖され、暖かい気候を利用して年に二回も三回も養殖されています。



ウシエビ (体長22センチ)

りとして池の中でただ大きく育てても卵を産んでくれません。「ニワトリが先か?卵が先か?」ウシエビの場合、卵を産んでくれる親を人為的に作ることから考えなければなりません。そんなときどこかのオジサン(確かフランス人だったと思います)が「眼柄」という)に成熟を抑制するホルモンの分泌器官があるのを知り、これを取り除いてしまうことを考えつきました。エビにとつては災難ですが、その後各国でエビの目玉をチョン切つて卵を産ませ

りますか? エビ養殖は生き物相手だから、その地域の気候風土に大きく左右されます。したがって、地域にしっかりと根を下ろさなくては成功は望めません。一方、近年エビの漁獲量が頭打ちとなり、今後世界中でエビ養殖に対する関心は一段と高くなるのが予想されます。つまり、エビ養殖は、世界各地で地方に根を張った地場産業となる可能性を多分に持った事業と言えるでしょう。



いぬいてるお 昭和二十八年八月二〇日、島根県松江市に生れる(三〇才)。五三年、長崎大学水産学部修士課程修了。五三—五六年、青年海外協力隊員として中米ホンジュラス共和国にて漁業開発プロジェクトに従事。五七年二月日本栽培水産(株)入社と同時に油谷町民となる。現在、同社油谷研究所主任。

ようという研究が続けられました。我社でも昨年、日本で初めて卵を産ませることに成功し、今年は更に研究を重ね、ある程度の種苗量産化の目途が立つまでに至りました。今や、日本のエビ養殖技術を世界に広めようと、職員一同張り切っています。

エビ養殖がいかに国際化時代を迎えようと、常に地域の発展と共に歩まなくては、できる仕事ではないのです。だから、私にとつては、地方の時代も国際化時代も、矛盾する二つのことではなく、同時に進行しなければならぬひとつのことなのです。 エビ養殖を通して、世界各地の町づくりのお手伝いができれば、望外の幸せと思っています。



活エビの出荷